

オランダの中国系第二世代にみる学校適応の要因 文氏宗親会による学業達成賞受賞者へのインタビューから

著者	山本 須美子
著者別名	YAMAMOTO Sumiko
雑誌名	白山人類学
巻	19
ページ	9-32
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008977/

オランダの中国系第二世代にみる学校適応の要因
——文氏宗親会による学業達成賞受賞者へのインタビューから——

山 本 須 美 子*

The Factors of School Success among Second Generation Chinese in the
Netherlands: Based on the Interviews with Recipients of Academic Awards
from Man Clansmen Association

YAMAMOTO Sumiko*

Abstract

The purpose of this paper is to reveal factors contributing to school success among recipients of academic awards and to reconsider the discussion of school success, or lack of success, among second-generation Chinese according to the parents' and students' understanding of academic achievement and the deposition of social capital produced by the Man Clansmen Association. The findings are based on interviews carried out by the author in February 2015 with 10 recipients of academic awards granted by the Man Clansmen Association, which was established in the Netherlands in 2000 for people with the surname Man. Survey results indicated that parents wished for their children to graduate from school in order to become independent but that they did not enforce or help with studies and were not fixated on their child's school level or future employment. In addition, the parents did not form human relations centered on the Man Clansmen Association, and receiving academic awards was largely unconnected to the parents' honor and pride. Receiving an award was not important to either the students or their parents, with the exception of parents in their 80s. Thus, even in the Man Clansmen Association, which is the only provider of academic prizes among associations for second-generation Chinese in the Netherlands, no deposition of social capital was linked to academic achievement.

A factor in the award recipients' academic success is that parents stress education as a means for their children's independence in a lifestyle in which parents do not put pressure on their children or

* 東洋大学社会学部 ; Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ yamamoto-s@toyo.jp

help with their studies and in which parents themselves are required to work long, hard hours. Within such a lifestyle, the children have developed independence and live without relying on their parents, having developed a sense of responsibility and diligence. This conclusion demonstrates that the factors of academic success can be explained by the parents' socioeconomic status and social capital, a new point of view that has not been identified in previous research on the academic success or non-success of second-generation Chinese.

キーワード：中国系第二世代，学校適応，文氏宗親会，学業達成賞，オランダ

Keywords: Chinese Second Generation, School Success, Man Clansmen Association, Academic Awards, the Netherlands

はじめに

アメリカでベストセラーとなり中国式の子育てをめぐる議論を巻き起こした A. チュア (Amy L. Chua) による『タイガー・マザー』[2011] は、アメリカに移住した中国人女性が、二人の娘に施した英才教育の回想録である。チュアは、自らの子育ての成功を中国文化に帰するものとして西欧式子育てに対して東洋式子育ての優位性を主張した。しかし、彼女と夫はエール大学の教授であり、親の階層的地位やそれが生み出す文化資本が子どもの学業達成に及ぼす影響を無視していると批判された [Lee and Zhou 2014]。

マイノリティの子どもの学校適応・不適応¹⁾については、文化か構造かをめぐって議論されてきたと指摘されている [e.g. Gibson 1988, Ngo and Lee 2007]。文化に基づく説明は、学校と家庭のもつ文化的価値の差異に焦点を当て、構造に基づく説明は、階級間の不平等再生産を説明するのに個人が家庭から受け継いだ文化資本に焦点を当てた P. ブルデュー [Bourdieu 1974] の社会文化的再生産理論を援用した。そして、文化に基づく説明と構造に基づく説明を結びつけたのが、エスニック・コミュニティの役割とエスニック集団の歴史的経験を重視した、オグブによる文化・エコロジカル的説明である [Ogbu 1978, 1987]。この立場からは、文化と構造が相互作用する場としてのエスニック・コミュニティが、マイノリティの子どもの学校適応・不適応に果たす役割に焦点を当てた検討がされてきた [Ngo and Lee 2007] ²⁾。

1) ここでの「学校適応」とは学校で比較的高い成績を上げ、問題が顕在化することがなく学校を卒業することを、「学校不適応」とは成績不振や留年や欠席や退学等の問題を抱えることを指すものとする。

2) アメリカに 1965 年の移民法改正以降に移住してきた移民第二世代の学業達成や適応様式を説明した理論である A. ポルテスと M. チョウによる「分節化された同化理論 (Segmented Assimilation Theory)」 [Portes and Zhou 1993] でも、親の人的・経済的資本が不足していても、エスニック・コミュニティ

中国系の子どもは、学校適応の成功例としてその要因が論じられてきたが³⁾、特に親の階層的地位や学歴が低く中産階級的文化資本を持たない中国系アメリカ人の学校適応や社会的上昇に関して、中国系コミュニティが果たす役割に焦点を当てた研究[e.g. Zhou 2005]がなされた。

本論で対象とするオランダの中国系第二世代の場合も、親の階層的地位や学歴が低く中産階級的文化資本を持たないが、大学進学率が高くホワイトカラー層に進出し社会的上昇を遂げている[山本 2015b]。筆者がこれまでにインタビューを実施したオランダの中国系第二世代 51 名では、大学院・大卒以上が約 3 分の 2 を占めている⁴⁾。大学進学率が戦後最高である現在約 10%であることを鑑みれば、中国系第二世代はかなり学歴が高く、他方、親は小学校か中学校卒で学歴は低かった[山本 2015b]。ではオランダの中国系第二世代の学校での成功は、中国系アメリカ人の事例において焦点を当たられてき中国系コミュニティの果たす役割によって説明できるのか、できなければ学校での成功はどのように説明できるのか、が本論の問いである。

本論では、その問いに答えるのに、オランダに 2000 年に設立された同姓団体である僑欧文氏宗親会が 2006 年から年に一度、高校、大学と大学院を卒業した文氏次世代を表彰するための学業達成賞に着目する。僑欧文氏宗親会を構成する文氏一族は、イギリスには 4,000 人以上、オランダには約 2,500 人が在住し、文氏宗親会は 1977 年にロンドンに、2000 年にオランダに設立された[Man 2011: 2]。文氏一族の 9 割以上の郷村である香港新界の新田村については、人類学者 J.ワトソン (James Watson) が 1969 年から 71 年にかけての調査に基づいて移民母村としての当時の状況をモノグラフ[ワトソン 1995]にまとめている。ワトソンはロンドンの文氏の人々は、世界を文氏一族とそれ以外とに分ける伝統的な宗族中心の態度を維持していると述べている[ワトソン 1995: 205]。文氏の大部分の人々は宗族内における彼らの地位の方が外部の社会的ネットワークにより得られるいかなる地位よりも重要だと考えている。彼らの主要な準拠集団は依然として文氏一族なのであり、その成員であることは彼らにとって非常に大切なことなのであると説明されている[ワトソン 1995: 215]。

オランダに移住した文氏の人々も宗族成員との人間関係を重視していたと考えられるが、オランダに宗親会が設立されたのは、第一世代の多くが引退の年齢になった 2000 年であった。

の価値と連帯を保持することによって補うことができれば、社会的上昇を果たすと指摘された。

3) 山本[山本 2014; Yamamoto 2015]は、パリの温州系新移民の子どもにみられる学校不適応について検討しているが、これは中国系の子どもの教育に関する稀な研究である。

4) オランダの学校制度は、4 歳から小学校に入学し、12 歳で「シト・テスト (Cito Toets)」という全国統一テストを受ける。その結果によって、研究大学進学準備学校 (VWO)、高等職業教育機関準備学校 (HAVO)、中等職業訓練学校準備学校 (VWBO) の 3 コースに分かれる。コース間の移動は可能である。上位レベルの研究大学進学準備学校は 6 年制で大学教育 (WO) に、中位レベルの高等職業教育機関準備学校は 5 年制で高等職業教育機関 (HBO) に、下位レベルの中等職業訓練学校準備学校は 4 年制で中等職業訓練学校 (MBO) に進む。51 人中、大学院卒 7 人、大学院在学中 2 人、大卒 20 人、大学生 1 人、HBO 卒 8 人、HBO 在学中 3 人、HBO 中退 2 人、MBO 卒 4 人、VWBO 卒 3 人、中学校中退 1 人である。

宗親会設立に中心的役割を果たした初代会長は、自らの修士論文 [Man 2011] で、第一世代 116 人へのインタビューに基づいて、文氏宗親会の活動は、夕食会やリクリエーションが中心で、引退後の第一世代が相互交流し親睦を深めるのに大きな役割を果たしていると述べている。そして、宗族アイデンティティが強化されたことが、文氏一族にとって文氏宗親会設立のもつ意味であると指摘している [Man 2011: 47-48]。また、2009 年にはジュニア部門が設立され、約 170 人の若い世代の会員が登録しているが、シニア部門の行事に参加するだけではなく、独自にハロウィーンと夏休み、クリスマスにイベントを開催している。文氏宗親会設立によって、文氏第一世代は相互交流を深め、人間関係において最も重要であるとしている宗族アイデンティティをさらに強化し、若い世代もジュニア部門設立によって交流しているので、文氏宗親会は社会関係資本を生み出し得る存在として捉えることができる⁵⁾。

オランダの中国系アソシエーションは 1970 年代以降に多数設立され、2000 年代には 150 団体以上となったが⁶⁾、その中で学業達成賞を提供しているのは、最も有力な同姓団体である文氏宗親会だけである。2015 年 2 月に筆者がインタビューを実施したオランダ文氏宗親会幹部は、イギリスでの学業達成賞を見習ってオランダでも導入し、「次世代の学業達成は文氏の誇りであり親の誇りでもある。表彰することによって次世代の学業達成への意欲を高めることを目的としている。」と述べた。1 年の内で最大の行事である中秋節に開催される夕食会での学業達成賞の表彰式には、当人だけではなく家族も参加し、金一封 (100 ユーロ) と小さな盾が授与され、受賞者リストと父親や家族と一緒に写った表彰式での写真が毎年文氏宗親会のホームページに掲載されている。この写真には学業達成賞が本人だけではなく家族にも関わるものであることが示され、表彰式での受賞者や家族の経験には、受賞が会員との人間関係においてどのような意味を持つかが反映されていると考える。学業達成賞受賞者やその家族は、宗親会と関わりがあるので受賞したのであり、受賞者や親による学業達成の捉え方と、その受賞の背景や授賞式での経験、宗親会会員との人間関係を検討することを通して、文氏宗親会の生み出す社会関係資本と学業達成との結びつきを明らかにしたい。

方法としては、2015 年 2 月に筆者が実施した学業達成賞受賞者 10 名へのインタビューに基づいて、受賞者や親による学業達成の捉え方と、文氏宗親会の生み出す社会関係資本が学業達成に果たす役割を明らかにし、これらのインタビューから析出できる受賞者の学校適応の要因を検討する。10 名のインタビュー対象者の属性については表 1 に示したが、インタビューから読み取れる 10 名に共通していると捉えられる学校適応の要因を検討する。また、親の子どもへの教育への態度については、子どもが親による自らの教育への態度をどのように捉えているか

5) 山本は別稿 [2015a] で、文氏宗親会の活動に参加することが、第一世代と 2009 年に結成されたジュニア部門の若者のそれぞれに対してどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを通して、宗族の一員としてのアイデンティティの代代的変化を明らかにし、文宗族の持続性について考察した。

6) オランダの中国系アソシエーションの詳細については、山本 [2014: 90-99] 参照。

が学業達成と関連していると考え、親自身にはインタビューをしていない。

分析の手順としては、II では中国系移民の学校適応に関する先行研究を整理し、III で文氏一族のオランダへの移住の歴史的背景を検討し、インタビュー対象者の属性を移住史に位置づける。IV では、学業達成賞受賞者へのインタビュー結果に基づいて、受賞者と親の学業達成の捉え方、親の子どもの教育への態度、そして文氏宗親会が生み出している社会関係資本について検討する。V では IV で析出した調査結果に基づいて、受賞者の学校適応の要因を検討し、それを中国系移民の学校適応・不適応をめぐる議論に位置づけて考察する。

表 1 インタビュー対象者（文氏：学業成就賞受賞者）の属性表

事例番号	性別	年齢	本人				父親				母親								
			職業	投資式	学歴	結婚歴	宗教	年齢	出身地	移住年	職業	現在居住地	年齢	出身地	移住年	学歴	職業	現在居住地	
1	F	20歳	大学生 (空間設計)	不参加	VWO	未婚	無	59歳	新田村	1972年(16歳)	高校中退	コック	オランダ	49歳	香港	1982年(18歳)	高校中退	ウェイイレ	オランダ
2	M	28歳	献血会社社員	不参加	修士	既婚(中国 出身留學生)	無	60歳	新田村	1967年(15歳)	小学校卒	レストラン経営	オランダ	53歳	流浮山	1976年(14歳)	小学校卒	ウェイイレ	オランダ
3	M	27歳	銀行員	参加	学士	未婚	無	60歳	新田村	1967年(12歳)	高校卒 (オランダ)	エンジニア・引退	新田村	53歳	流浮山	1980年(16歳)	小学校卒	ウェイイレ・ 引退	新田村
4	F	29歳	銀行員	参加	修士	未婚	無	60歳	新田村	1967年(12歳)	高校卒 (オランダ)	エンジニア・引退	新田村	53歳	流浮山	1980年(18歳)	小学校卒	ウェイイレ・ 引退	新田村
5	M	25歳	大学院生 (社会学)	不参加	学士	未婚	クリスチャン	54歳	新田村	1974年(13歳)	高校中退 (オランダ)	シェフの後、 スーパーマー ケットマネ ージャー	オランダ	49歳	香港島	1989年(23歳)	看護学校卒	ウェイイレ	オランダ
6	F	44歳	銀行員	参加	修士	既婚(スリナム系 第二世代)	ムスリム	87歳	新田村	1950年代後半 (30代後半)	小学校卒	コック・引退	オランダ	80歳	米埔村	1966年(31歳)	小学校中退	ウェイイレ	オランダ
7	M	33歳	会社社員	参加	修士	未婚	無	65歳	新田村	1973年(21歳)	小学校卒	コック	オランダ・2.3 年後に引退 後新田村へ	60歳	香港島	1974年(19歳)	小学校卒	ウェイイレ	オランダ・2.3年 後に引退後新田 村へ
8	F	23歳	大学生(医学)	不参加	VWO	未婚	無	52歳	錦田村	1990年 (27歳位)		コック・引退	錦田村	46歳	元部	1983年(12歳)		ウェイイレ・ 老人施設職員	もうすぐ錦田村
9	M	20歳	大学生(国際ビ ジネス)	参加	VWO	未婚	無	65歳	新田村	1968年(18歳)	高校中退	コック・引退	数ヶ月後新田 村へ	44歳	広東省から 香港へ不法 移住	1999年(27歳) ドイツ(20歳)	小学校卒(広 東省)	ウェイイレ	オランダ(離婚)
10	F	33歳	旅行会社社員	参加	HBO	未婚	無	59歳	新田村	1972年(16歳)	高校卒	レストラン経営・ 引退	新田村	59歳	元部村	1976年(20歳)	高校卒	ウェイイレ	オランダ(離婚)

I 中国系移民の学校適応に関する先行研究の整理

中国系移民の教育に関する研究は、中国系アメリカ人を対象に学校適応の理由を説明したものが多く、それらを整理した S・F. シウ [Siu 1994] は、儒教に基づく文化的価値による説明が最も多いと指摘している。つまり、中国系アメリカ人には学業を尊重する儒教に基づく文化的背景があり、階層的で緊密な家族構造は子どもが学校で一生懸命に勉強することを促し、親に家庭での勉強に目配りさせ、さらに、親子関係が学校での教師と生徒との関係に重なり、家庭で教えらるる価値が学校の教師によって尊重されるから、子どもが学校で成功するという説明である [Siu 1994: 23]。しかし、こうした文化的価値による説明は、本質的文化概念に基づいている点が問題として指摘できる。

エスニック・コミュニティが次世代の学校適応や社会的上昇に果たす役割に着目した研究も、中国系アメリカ人を対象に行われてきた。M. シュウは、エスニック・コミュニティが生み出す資源を検討するためには2つのレベルがあるとしている。第一は、エスニック・コミュニティ内に政治・商業団体、エスニック・メディア、公共施設などの公式の制度がどの程度存在しているのか、第二は、社会関係資本⁷⁾を生み

7) 社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)を政治学者 R. パットナムは「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」と定義している [Putnam

出し蓄積するために個人的人間関係がエスニシティによってどのように構造化されているかである [Zhou 2009: 1156]。そして、シュウ [Zhou 2005] は、ニューヨークのチャイナタウンをエスニック・エンクレーブという概念で捉え、エスニック・エンクレーブ内での様々なエスニック組織への参加がエスニック・ネットワークを強化し、エスニック・アイデンティティやエスニック連帯を強め、それが社会関係資本となって、子どもの学校での成功に結びついていることを明らかにした。チャイナタウンの既製服工場で働く女性たちが日常的関わりにおいて、子どもの教育に関する情報や教育を重視する価値を共有し、子どもも親からの期待をエスニック・コミュニティへの参加によってさらに強く感じるようになり、親の低い階層的地位や親からの支配を抜けだす道は教育しかないと考えることが学校での成功につながっていた [Zhou 2005]。

さらに、シュウは J. リーと共同で [Lee and Zhou 2014] 「フレーム」概念⁸⁾を導入して、何を「良い教育」さらには「良い仕事」や「成功」とみなすかというフレームの違いによって移民第二世代のエスニック集団別学業達成の違いが説明できるとしている。ここで用いられたフレームとは、社会がいかに動いているかを理解する集団に共有された様式であり、フレームは、エスニック・コミュニティの社会関係資本に支えられ、ホスト社会によるエスニック集団の評判によって強化される [Lee and Zhou 2014]。親の階層的地位や学歴が低いロサンジェルス中国系とベトナム系アメリカ人第二世代 82 名へのインタビューを実施し、結論として、インフォーマントとその親にとって、学業達成とは高校を主席で卒業し、トップレベルの大学に入学し、医者や法律家、薬剤師、エンジニアになるために大学院に進学することを意味し、そうしたフレームで学業達成が捉えられているので、中国系コミュニティのもつ社会関係資本が活用され、それが子どもの学校での成功につながっていると指摘された [Lee and Zhou 2014]。リーとシュウによるメキシコ系アメリカ人第二世代へのインタビュー結果も加えた研究では、中国系やベトナム系第二世代とは対照的に、メキシコ系第二世代や親の間ではトップレベルの大学を卒業することは重要とは捉えられておらず、エスニック・コミュニティの社会関係資本も中国系やベトナム系より活用されていないことが学校不適応につながっていると指摘された [Lee and Zhou 2013]。

ニューヨーク近郊の中国系の子どもが通う西洋音楽学校でフィールドワークを実施した W.T. ルーは、西洋音楽学校を通じた情報網が、中産階級の中国系家族にだけでなく、労働者階級のそれにも社会関係資本となっていることが、中国系の子どもを学校での成功に導いていると述べている [Lu 2013]。

ヨーロッパにおける中国系移民の学校適応に関する研究は極少ない中、教育社会学的アプロ

2000: 19)。

8) 「フレーム」を我々が社会生活を観察し、解釈、そして分析するレンズとして捉えているゴフマン [Goffman 1974] に依拠している [Lee and Zhou 2013]。

一からイギリスの中国系の子どもがなぜ成績が良いのかを論じた L.アーチャーと B. フランシスは、中国系の親 30 人にインタビューを行い、全員が子どもにとって教育が大切であると信じているとして、そうした親の教育への態度が子どもの高い学業成績につながっていると指摘した [Archer and Francis 2007: 75]。

アメリカとオランダにおける 30 代の中国系二世代の親へのインタビューを実施した K.R. ノアムは、儒教的価値を背景とする中国文化に基づく子育てへの態度をアメリカとオランダで比較検討している。結論として、アメリカの中国系二世代の親は子どもに高い学業達成を望むが、オランダの場合は子どもの自由な選択と幸福を望んでいて、その違いは両国の教育システムや社会保障に関わる国家的コンテクストの違いによって生み出されたと指摘された [Noam 2014]。

また、イギリス、フランスとオランダの中国系二世代の学校適応について検討した筆者 [山本 2014] は、3 国の中国系二世代へのインタビューに基づいて、日常的経験を通して形成された「成功の民俗理論 (folk theory of success)」を読み取り、中国系二世代の学校適応の理由を成功の民俗理論という視点から検討した。成功の民俗理論とは、J. U. オグブ [Ogbu 1991] が提唱したもので、人々が何を成功とし、それをどのような手段で得られると捉えているのかであり、主流社会の学校教育を成功のための手段としてどのように捉えているかを明らかにすることによって学校適応・不適応を説明しようとするものである。これは前述のリーとシュウ [Lee and Zhou 2014] が用いたフレーム概念と重なる。3 国の中国系二世代とその親は、主流社会での学校教育を成功のための手段として重視する民俗理論を共有していて、それが学校適応につながると指摘した [山本 2014]。

しかしながら、ヨーロッパの中国系移民の学校適応に関する研究では、中国系アメリカ人を対象として実施されてきたような、中国系コミュニティの役割が学校適応に果たす役割を検討したものはない。筆者は中国系二世代と親にみる成功の民俗理論を検討した [山本 2014] が、親の人間関係やその延長上にある社会関係資本と学校適応の結びつきについては十分な検討はしていない。本論では、文氏宗親会の学業達成賞受賞者へのインタビューに基づいて、受賞者や親による学業達成の捉え方や中国系コミュニティの生み出す社会関係資本を明らかにすることを通して、学校適応の要因を検討したい。結論を先取りしていえば、オランダの中国系二世代の場合、リーとシュウ [Lee and Zhou 2014] が中国系やベトナム系アメリカ人において指摘したような、トップレベルの大学を卒業をして法律家や医者になることを望むような学業達成をめぐるフレームは析出されず、中国系コミュニティの社会関係資本は、学校適応に大きな役割は果たしていなかった。インタビューから読み取れた学校適応の要因として、親は子どもの自立の手段として学校教育を重視するものの、飲食業での長時間重労働に迫られた生活の中で、子どもに独立心や勤勉さが培われたことを指摘する。これは、これまで指摘されなかつ

た要因であり、新たな見解を提示することになる。

II 文氏一族のオランダへの移住史とインタビュー対象者の位置づけ

1 文氏一族の移住史

オランダの中国系移民約 12 万 5 千人 [Luk 2008: 43] の内、文氏一族約 2,500 人の 9 割以上は香港新界の新田村出身者であり、それ以外のほとんどは香港新界の州頭村出身者である。

ワトソン [1995] によると、一握りのよそ者の住民を除いて、新田の全ての男性は「文」という姓をもっており、文氏一族は、13 世紀の昔にさかのぼる輝かしい歴史をもつと自称し、その族譜によれば宋代の愛国者で国家的英雄である文天祥將軍の弟の子孫として、27 代目にあたる。

文氏のオランダへの移住は、1900 年代初めに船会社に雇われた船員によって始まったが、オランダへの中国系移民全体の移住と同じパターンを辿った。第二次世界大戦前にヨーロッパに渡った新田村出身の船員の何人かは、戦中に船を抜け出し、戦後すぐにロンドンやロッテルダムで中華料理店を開いた。海外で中華料理店を開けば儲かるという情報は郷村に届き、その後の文氏の人々の大規模な移民の足掛かりをつくった。ほとんどの移民は家族を故郷に残した単身男性であったが、移住先で結婚して家庭を築く者もいた。

戦後 1950 年代になると、新界では、中国から移住してきた農民たちが小面積の土地を借り、香港の都市市場向けの野菜を生産し、米を基盤とする従来の経済を一変させるいわゆる「野菜革命」が始まった。大多数の文氏の世帯では 1960 年から 1962 年の間に農業をやめたが、教育程度が低く技術もない文氏の人々には、都市部にも就職先がなく、ヨーロッパに機会を求めざるを得なかった。

文氏の人々の移住先は、主にイギリスであった。戦後イギリスには植民地や英連邦諸国からの移民制限がほとんどなく、1948 年イギリス国籍法のもと、香港市民はイギリスへの入国と居住の権利を持っていたからである。また、戦後の景気がよく、イギリス人がよりよい食生活を求めるニーズとマッチして中国料理ブームが起きたことも、文氏の人々がイギリスを移住先に選んだ理由であった。彼らは、移民のための手続きを文氏一族に頼ってイギリスに渡り、移住後も就職や住居を斡旋してもらい、文氏一族の経営する中華料理店で働いてお金を貯めて、中華料理店を開いた [ワトソン 1995: 70]。労働力不足から 1964 年外国人労働許可法によって外国人に働く権利を与えたオランダには、イギリスのパスポートを保持していれば再移住でき、ベルギーや西ドイツにも移住する者もいた [Man 2011: 56]。1960 年代後半には少なくとも 1,000 人の新田村からの移民がヨーロッパで暮らし、約 600 人はイギリス、350 人はオランダ、50 人が西ドイツとベルギーにいた [ワトソン 1995: 30]。2009 年から 2010 年にかけてマンが

調査したオランダの文氏 116 人の移住年によれば、連鎖移民は 1950 年代に始まり、最初のピークは 1962 年、第二のピークは香港で政治暴動の勃発した 1967 年で、1968 年以降 1975 年まで続いた [Man 2011: 112]。

1970 年代半ばまでには、働ける文氏男性のほとんどが、妻子や老人を故郷に残して、海外に移住した。村の経済は、働ける男性の約 9 割を占めるヨーロッパへの移民からの送金で成り立っていて、2 階建て住宅の建設ブームになり、それは家族の成功の象徴であると共に、村に残っている者に移住を駆り立てた。移住後の彼らの心はいつも故郷にあり、外国にしながら郷村での自分たちの存在を示すために、新年会を開いたりする等、故郷に多額の投資することを厭わなかった [ワトソン 1995]。

中国料理に関わる飲食業は 1960 年代から 1970 年代に繁栄を極め、1946 年から 1950 年にはオランダ全土に 65 軒しかなかった中華料理店は全国に広がり、1982 年には 1,916 軒になった。1970 年代中頃からは次第に家族を呼び寄せる者やオランダ生まれの子どもが増えた。1980 年代になると中華料理店が飽和状態になり、経済不況や衛生問題スキャンダル等によって、中国料理ブームは去り、店舗数は横ばいとなり、倒産する店も現れた。

現在、第一世代の多くは 60 代前後の退職年齢になり、1990 年代中頃からは、ビジネスや引退後の生活のために新田村や州頭村に帰還する者が増加している。故郷に永住しないで数か月ごとに故郷とオランダを行き来する者もいる。そして、オランダ生まれの第二世代の多くは 20 代、30 代となっているが、親の中華料理店を継いだ者は極少数で、オランダで高い教育を受けホワイトカラー職に就き、第三世代が学齢期となっている。

2 インタビュー対象者の属性

インタビュー対象である文氏宗親会学業達成賞受賞者 10 名は全員オランダ生まれの第二世代で、7 名は 20 代、2 名は 30 代、1 名は 40 代である [表 1 参照]。学業達成賞授与が開始されたのが 2006 年なので、40 代が大学卒業時にはまだ開始されておらず、40 代女性 (事例 6) の場合は就職後の通信教育による修士号取得時に受賞していた。10 名中 4 名が修士課程卒、2 名は大卒であり、1 名は大学院生、3 名は大学生、30 代女性 (事例 10) は高等職業教育機関 (HBO) 卒である。オランダでは小学校最終学年 12 歳で「シト・テスト (Cito Toets)」という全国統一テストを受け、中等教育入学時に 3 レベルに分かれる。8 名は上位レベルの研究大学進学準備学校 (VWO) を、2 名 (事例 5, 10) は中位レベルの高等職業教育機関準備学校 (HAVO) を修了している。事例 5 は下位レベルの中等職業訓練学校準備学校 (VWBO) から高等職業教育機関準備学校 (HAVO) に移行している。就職している者は、オランダやフランスの大手銀行やオランダの会社でホワイトカラーとして働いている。

インタビュー対象者の父親は 50 代後半から 60 代、母親は 40 代から 50 代である。40 代女

性（事例 6）の両親だけが 80 代である。父親 8 名は新田村出身、1 名は錦田村出身であり、現在は父親 5 名と母親 3 名が新田村か錦田村に帰還しているか近いうちに帰還する予定である。職業に関しては、父親 2 名が中華料理店を経営、6 名がコックとして働き、1 名がエンジニアであった。母親は全員がウェイトレスとして働いていた。学歴は両親共に低く、小学校中退か小学校卒、あるいは高校中退か高校卒であった。

父親 4 名（事例 3, 4 の姉弟、事例 5、事例 9、事例 10 の父親）は、先に移住した祖父が経営するレストランで働くためにオランダに移住していた。事例 3 と事例 4 の姉弟の父親は移住後にオランダで高校を卒業し、祖父の経営するレストランを手伝いながらエンジニアとして働いた。事例 5 と事例 10 の父親は、移住後オランダの高校を中退し、祖父の経営するレストランで働き、事例 5 の父親は、レストラン閉店後はスーパーのマネージャーとなり、事例 10 の父親は、祖父母の老後の面倒を見るために 10 年前に新田村に帰還した。事例 9 の父親は、祖父の経営するレストランで働くために 18 才でオランダに来たが、祖父死亡後はドイツでコックとして 20 年間働いた。母親は全員、オランダ移住後にオランダで教育を受けた者はいなかった。

III 学業達成をめぐるフレーム——インタビュー結果から

本章では、学業達成賞受賞者へのインタビュー結果に基づいて、受賞者と親の学業達成賞受賞や学業達成の捉え方、親の子どもの教育への態度、そして文氏宗親会が生み出す社会関係資本について検討し、リーとシュウ [Lee and Zhou 2014] が用いたのと同様の意味での学業達成をめぐるフレームを析出する。

1 受賞者にとっての学業達成

ここでは、受賞者が学業達成をどのように捉えているのかを、(1) 学業への姿勢、(2) 進路選択とキャリア、(3) 学業達成賞申請理由と授賞式の感想、という 3 点から検討する。

(1) 学業への姿勢

事例 1 の大学生は、3 人姉妹の一番下である自分だけが VWO に進み、大学に入学していた。

私は良い成績が取れるようにいつも学校では一生懸命に勉強したが、それは親に言われたからではなく、学校に通っている間は一生懸命に勉強するのが私のすることだと思っていたから。自分が将来何をやりたいのかわからなかったけど、勉強以外他にすることがなかったから。悪い成績を取るの嫌だったし、時々やりたくないと思ったこともあったけど、あきらめなかったのでも成績が良かった。——親が一生懸命働いているので、私たち姉妹は何不自由なく学校に通えているので、感謝している。だから自分も一生懸命に

勉強しなくてはと思うようなメンタリティを、中国系の子どもは皆持っていると思う。

大手銀行で働く 20 代女性（事例 4）は、VWO から大学、大学院へと進み修士号を取得していた。

私は両親が期待するよりも、ずっと自分自身の方が自分に期待し、勉強をした。私は自分で考えて勉強をし、大学に入る前に既に修士課程に進もうと決めていた。親は私の成績を心配する必要はなかった。

修士課程で社会学を学ぶ 20 代男性（事例 5）は、下位レベルの VWBO から中位レベルの HAVO に移行し HBO を卒業した。

小学校の頃は勉強なんてなくて、フットボールをしたりして遊ぶことしか考えていなかったけど、15、6 才頃から、自分が将来何をやりたいのかと考えるようになって、少しずつ勉強にも身が入るようになった。

大手銀行で働く 40 代女性（事例 6）は、小学校から勉強が良くでき、VWO から大学、大学院に進んだ。

いつも人からあなたは頭がいいねと言われた。親は大学教育を受けさせるお金がなかったので、自分で学費を稼がなくていけなく、叔父のレストランでアルバイトをした。親がレストランで重労働をしていることを見てきたので、自分たちはそんな重労働はしたくなかったし、私は勉強がしたかった。

30 代の会社員男性（事例 7）は、小学校ではとても成績が良く VWO から大学、大学院に進み修士号を取得している。

小学校から VWO の 3 年生までは一生懸命勉強したけど、4 年生になって考え方が変わった。人生は勉強だけではないと思うようになって、試験に受かる程度に勉強すればいいと考えるようになった。大学と大学院は通常 5 年で終えるのを 8 年かかり、何とか修士号を取ったけど、勉強の仕方が浅く、内容を本当には理解していなかった。

医学研修生である 20 代女性（事例 8）は、小学校の頃からとても成績が良かった。

私は本を読むのが好きだったので、自分からよく勉強をした。親は私に勉強しなさいなんて言う必要はなかった。物事すべてがとても興味深く、もっと本を読んで色々学びたかったから。

大学生男性（事例 9）は、ドイツで生まれ、5 才でオランダに両親と共に移住した。

小学校入学時はオランダ語がわからなかったのが成績が悪かったけど、オランダ語の力をつけて成績を上げて、小学校の最終学年で受ける統一テストではクラスで 1 番になった。親に言われたわけではなく、自分で宿題をした。オランダの子どもは宿題以外は遊んでいて、とっても幸せ。

（2）進路選択とキャリア

インタビュー対象者 10 名全員が、進路は自分で決め、誰からもアドバイスを受けなかったと答えた。親や他の人に特定の職業に就くように勧められた者はおらず、自らが興味を持った分野を選択していたのは全員が共通していた。空間プランニングや生物学、化学、国際経済、コンピューター工学、社会学、医学、国際経営、ウィンド・ディスプレイと、選択された分野は様々であった。

空間プランニングを専攻している大学生（事例 1）は、色々なことに興味があったので、学際的で広く人間やサステナビリティに関連する空間プランニングを選んだ。領域が広いので修士課程へ進学する予定で、その後の仕事はまだ模索中であったが、サステナビリティに関連する会社で働いて社会を変革したいと語った。

20 代男性会社員（事例 2）は、語学が好きではなく遺伝子に興味があったので、大学では生物学を専攻した。大学卒業後は献血会社に就職し、献血者の血を検査し、部分的に取り出して血を販売する仕事に携わっている。

20 代男性銀行員（事例 3）は、大学で国際経済・金融を専攻したが、それは興味がある分野であったし、この分野を学べば自分で稼げるようになると考えたからで、将来会計士になろうとは考えなかった。オランダの大手銀行で 3 年間働いた後、更なるチャレンジを求めてフランスの大手銀行に転職している。

修士課程で社会学を専攻する大学院生（事例 5）は、HBO では興味があったアジア経済を専攻し卒業後働いたが、カスタマーサービスの仕事が好きではなく 5 ヶ月で辞めた。その後会計学を学ぶ修士課程に入学するが合わなくて 1 セミスターで辞め、再就職先を探したが就職は難しかった。アルバイトをしたり 3 ヶ月間アジアを旅行した後、1 年前に修士課程に入学し社会

学を学んでいる。卒業後は正社員として雇ってくれる会社があれば、どんな会社でも働きたいと言った。

40代女性銀行員（事例6）は、高校での化学の成績はそれ程良くなかったので教師に反対されたが、化学だけではなく、物理も数学、生物学も関わる学際性に惹かれて自らの判断で大学では化学を専攻することを選んだ。修士課程に進み、卒業後化学の高校教師になろうとしたが、非常勤職しかなく、コンピューターができるので、求職のあった大手銀行 IT 部門に職を得て14年間働いた。金融業界に関わったことから、働きながら通信教育で MBA を取得し、3年前に新たなステップを踏み出すために、他の大手銀行に転職し、現在は金融コンサルタントとして部下を数人抱えている。

医学研修生（事例8）は、親に医者になることを勧められたわけではなく、人間の身体にとっても興味を持ち、成績も良かったので医学の道に進んだ。人を助けることができる医者の仕事に満足していた。

中国系旅行会社で働く30代女性（事例10）は、ウィンド・ディスプレイを学びたかったが HBO では学べなかったので、下位レベルの MBO で3年間学んだ後、興味を持ったマーケティング・コミュニケーションを HBO で2年間学んだ。卒業後2年間服飾店でディスプレイの仕事をするが、経済不況で解雇され、1年間の失業後香港出身の友人が経営する中国系旅行社で働いている。

以上から、必ずしも大学で学んだ分野が職業に結びついていない場合でも、10名共、自ら考えて自分の判断でキャリアを選択したといえる。

（3）学業達成賞応募と授賞式

受賞者は全員が父親に勧められて学業達成賞に応募していた。しかし、父親が喜ぶと思って応募した者はおらず、応募は卒業証書の写しをアソシエーションに郵送するだけなので、父親の勧めを断る必要もないので応募していた。

事例2は以下のように語った。

文氏宗親会は、学位を取った次世代を統計的に把握したいのかなあと考えて、新聞で学業達成賞のことを知った父親に勧められて、とりあえず申請した。（事例2）

毎年約300人が出席する中秋節の夕食会での授賞式に参加した者は10名中6名であった。欠席した4名は、仕事や学業等で都合がつかず参加していなかった。授賞式に不参加の場合、家族が賞金と盾を事務所で受け取った。

両親と叔父、弟と共に授賞式に出席した30代女性（事例10）は、授賞式の様子を以下のよ

うに述べた。

夕食会後にちょうど会長選挙があった時だったので、そちらの方に皆気が向いていた。授賞式ではちょっと緊張した。名前を呼ばれたらステージに上って、賞を受け取った。ステージで「お父さんはどなた？」と尋ねられたので名前を言ったら、新田村のどこの地区出身だねと言われて驚いた。父の名前を言うだけで、新田村のどこの地区出身かを皆が知っているから。でも授賞式後、両親は私の受賞について話す人がいたけど、私には話す人がいなく、私自身よりも親にとっての方が、授賞式は重要だったと思う。私は赤い封筒（金一封）に最も興味があった。

姉弟（事例 3, 4）は家族は出席せず、自分たちだけで出席していた。

授賞式のあった夕食会では個人的に私たちのことを知っている人は誰もいなかったし、私たちも知人は誰もいなかったので楽しくなかった。同じ姓を共有しているというだけで、文氏の一員という意識もなかった。

40 代女性（事例 6）は、毎年両親が夕食会に参加し、授賞式には両親と兄、妹 2 人も列席し、両親がとても娘を誇らしげにしていたと言った。また、父親と参加した 30 代男性（事例 7）は、授賞式について以下のように語った。

授賞式では大勢の人の前で話すのが恥ずかしかったし、広東語で自分が専攻したコンピューター工学を説明することが難しかった。授賞式は自分にとって、ただ学業を修了したことを意味していただけ。

20 代大学生（事例 9）は、父親と義理の兄、いところ数人と一緒に受賞し、100 ユーロがもらえたのが良かったと述べたが、受賞者にとって受賞は重要視されていないことがわかった。

2 親の教育への態度

インタビュー対象者 10 名の両親の教育への態度は共通していて、全員が子どもに勉強を強いることはなく、親からのプレッシャーを感じた者はいなかった。そして、親はオランダの教育制度についての知識がなく、子どもの勉強を実際に手伝うこともなかったが、子どもの自立する手段として学校を卒業することを望んでいた。

校内の中国系生徒で唯一 VWO を修了して受賞した 20 才大学生（事例 1）は、父は受賞を

それ程喜ばなかったと言った。

両親は教育は大切と思っていて、学校を卒業してほしいとは思っていたけど、勉強を強制することではなくて、やりたいようにさせてくれた。私が落第しようと、何しろ卒業して、最善を尽くしていればそれで良かったので、受賞を気に留めていなかった。親は、オランダの教育制度について知らないで、どれがレベルが高いのかを知らないから、私が努力していればそれで良くて、もし受賞しなくても悲しんだりすることもなかった。(事例1)

また、20代男性(事例2)と20代女性(事例4)は、親の教育への態度について以下のよう

に語った。

両親は良い仕事に就くためには一生懸命に勉強しなさいと言ったが、ベストを尽くせばいいと。長姉と私はVWOに進み次姉はHAVOだったけど、比べたことはなかった。——例えば、コンピューターが欲しかったら、自分で稼いで買いなさいという態度だった。(事例2)

親は教育が大切なんて特に言わなかった。私がそう思っていたので、特に言う必要はなかった。私は学校が好きだったから。祖父は私達孫が良い教育を受けて、中国語ができればいいと言っていたけど。(事例4)

中等教育で下位レベルのVWBOに進んだ大学院生(事例5)の親は、レベルを気にしなかった。

両親はオープンで、何かをしなさいと私に押し付けたことはなかった。親にVWOやHAVOに進む程成績が悪くなくてVWBOに行くと言った時も失望することもなく、「そうなの」と言っただけだった。私の中国系の友人も親が勉強を強いることはなかったと言っている。成熟年齢が人によって違うのだから、親は子どもに何かを押し付けてはいけないと思う。12,3才で大人になる人もいれば、私の場合は15,6才まで成熟していなかったもので、進路を決めるのは難しかった。サッカーとか遊ぶことしか考えていなく、将来のことなんて考えていなかった。親は、何かを禁止することではなく、ただ悪い人と付き合っ

30 代女性（事例 10）は、親からどんな学校でも卒業するように言われた。

親は勉強を強いなかったけど、どんな学校でもレベルは関係ないから卒業するように言った。なぜなら自分で食べていけるようにならなくてはいけないから。好きな勉強を選んだ方が卒業できるし、好きな分野で働けるからと。頭が良くないかもしれないから大学に行けと言われなかったし、もっと勉強したかったら援助してあげるよという態度だった。（事例 10）

80 代の親をもつ 40 代女性（事例 7）は、息子と娘では親の教育態度が異なっていたと言ったが、他の親にはそれはみられなかった。

親は古い考えで、息子が最も大切で、娘は結婚すればいいと思っていたから、私に勉強しなさいということはなかった。

親子関係に関しては、思春期に親と口げんかをするのがあっても深刻なものではなく、10 名とも良好であった。

3 文氏宗親会と社会関係資本

ここではインタビュー対象者の父親の個人的人間関係や文氏宗親会との関わり、学業達成賞の捉え方、またインタビュー対象者の文氏宗親会との関わりを検討することを通して、文氏宗親会が学業達成をめぐるどのような社会関係資本を生み出しているのかを明らかにする。

文氏宗親会の主な活動は、旧正月と中秋節の夕食会開催、夏に実施される日帰り旅行である。活動への参加者の大半は、60 代から 70 代の第一世代であり、旧正月の夕食会の参加者は約 50 人、中秋節の夕食会は、家族で参加する人も多く 300～400 人で、ジュニア会員も 20～30 人参加し、最大の行事となっている。2009 年に設立されたジュニア部門には約 170 人が登録しているが、シニア部門の行事に参加するだけでなく、独自にハロウィーンと夏休み、クリスマスにイベントを開催している⁹⁾。

インタビュー対象者全員の父親の友人関係は、中国系の友人に限られるか、事例 3 と事例 4 の姉弟や事例 7 の父親のように、オランダ移住後に教育を受けているのでオランダ語を流暢に話せオランダ人の友人がいる場合でも、中国系の友人の方が多かった。しかし、中国系の友人は文氏の人に限定されていなく、文氏の人とのみ親しく交友していた父親はいなかった。事例

9) 文氏宗親会の活動について詳しくは、山本 [2015a] を参照。

6の80代の父親以外は、ワトソンが調査した1960年代後半にはまだ10代前半から中頃であり、現役でレストラン業に携わっていた時期よりも60代前後になった現在の方が人付き合いが多くなっていた。80代の事例6の両親も、中国系年配者が集まる他のアソシエーションに毎週通って文氏以外の人もとも交流をしていた。

事例2と事例7の父親は文氏宗親会の活動には参加したことはなく、学業達成賞については新聞で知って、子どもに教えていた。事例5の場合、祖父が毎年自分たち兄弟を連れて夕食会に参加していたが、父親は香港が好きではなく活動に参加したことはなかった。それ以外の6名の父親は夕食会や日帰り旅行に何回か参加したことがあり、事例1と事例6の父親は、母親も伴って毎週アムステルダムの子イナタウンにある事務所を訪れて麻雀等を楽しんでいた。

10名の内、親が自らの受賞を喜び、授賞式での受賞を誇りにしていたのは、文氏宗親会設立時から活動に参加していた事例6の80代の親だけであった。他の親にとって受賞はそれ程重要なことではなかった。事例5は、祖父が生きていれば、学業達成賞受賞を誇りにし喜んでであろうが、親は学業達成賞受賞をそれ程喜んではいなかったと語った。

つまり、父親の個人的人間関係は中国系の友人の方が多いが、文氏の人々によるネットワークを重要視することではなく、ワトソンの指摘〔ワトソン 1995: 215〕とは異なっていた。それゆえ、父親は文氏宗親会の夕食会での授賞式での子どもの表彰をそれ程重要なことと捉えず、誇りとしなかったといえる。

次に、インタビュー対象者と文氏宗親会との関わりについてだが、10名中6名は親に伴って夕食会に参加した者もいるが、ジュニア部門の活動に参加したことはなかった。事例2は新聞を見た父親から学業達成賞を知らされるまで、文氏宗親会の存在を知らなかった。

事例3は、文氏宗親会のジュニア部門のSNSに加わり、3年前にジュニア部門の企画した夕食会に1度だけ参加したことがあった。知らない人と知り合えるのは良かったと言ったが、関係を持続させていなかった。事例5が参加した唯一の活動は、宗親会が初めて企画した3年前の新田村訪問旅行であった。この旅行にはジュニア会員約15名とシニア会員5名が参加し、歴史的建造物を訪問し、文氏宗族の背景を学んでとても興味深いものであったと語った。事例7と事例9はジュニア部門の企画する夕食会に数回参加したことがあるが、文氏の若者に特別に親近感を抱いてはいたわけではないが、同じ姓を共有する者と交流するのはユニークであると捉えていた。

以上から、インタビュー対象者にとっても親にとっても、文氏宗親会をめぐって形成される人間関係は大きな位置を占めてはいないことがわかった。文氏宗親会は学業達成授与以外には次世代の学業達成につながる実践はしておらず、また親同士が教育に関わる情報交換をする等のネットワークは形成されていなかったため、学業達成に結びつく社会関係資本を生み出しているとはいえないことが明らかとなった。

IV 考察——学校適応の要因

リーとシュウは、親の階層的地位や学歴が低く中産階級の文化資本を持たないロサンジェルス中国系とベトナム系アメリカ人第二世代インフォーマとその親にとって、学業達成とは高校を首席で卒業し、トップレベルの大学に入学し、医者、法律家、薬剤師かエンジニアになるために大学院に進学することを意味し、そうしたフレームで学業達成が捉えられているので、中国系コミュニティの社会関係資本が活用され、それが子どもの学校での成功につながっていると指摘した [Lee and Zhou 2014]。

しかし、本論のインタビュー対象者とその親は、学業達成をめぐる上記とは異なったフレームを形成していた。親は子どもが自立するために学校を卒業することを望んではいたが、勉強を強いることはなく、学校のレベルや子どもの将来の職業にこだわりはなかった。また、親は文氏宗親会を中心とした人間関係を形成せず、学業達成賞受賞は親の面子や誇りにはほとんど結びついておらず、事例 6 の 80 代の親以外、受賞者にも親にも受賞は重要なことではなかった。オランダの中国系アソシエーションの中で唯一学業達成賞を授与している文氏宗親会においても、学業達成につながる社会関係資本は析出されなかった。

それでは、これらのインタビュー結果から受賞者の学校適応の要因はどのように説明できるのか。親は子どもの自立のために学校教育を重要であると捉えていて、学校のレベルに関わらず卒業することを重視していたことがインタビュー対象者の語りから読み取れた。しかし、子どもの学業達成は親の誇りや面子に結びついておらず、親は子どもの学業に高望みをしたり勉強を強制することがなく、受賞者には親からのプレッシャーを感じた者はいなかった。そして学歴の低い親は、実際には子どもの勉強や学校選択、進路選択を手助けすることもなかった。

他方、受賞者の学業への態度からは、親に言われたのではなく、自ら勉強をしていたことが読み取れた。受賞者は、学力に応じて高いレベルの学校に進む者もいれば進まない者もいたし、必ずしも皆が勉強に励んでいたわけではなかった。しかし、自らの判断で進路を決め職業を模索して、学校不適応に陥る者はいなかった。結果として、親よりはるかに高い教育を受け、学校教育を手段として社会的に上昇していた。また、10 名中 5 名は、親か祖父、親族の経営する中華料理店で 10 代中頃から大学を卒業するまで働いた経験があった。事例 2 は大学入学後一人暮らしをして家を離れても、毎週末実家に帰り必ず親の店を手伝って月曜日朝に大学に戻っていたが、子どもが責任感を持つことはいいことであって、これはオランダの若者には欠けている点であると強調した。事例 6 は大学生で学生結婚し大学に通いながら子どもを育てたが、親に頼ることなく子育てをする一方、10 代前半からオランダ語ができない親に代わって書類処理や病院への付き添い等親を助けていた。

つまり、親は子どもの自立のための手段として学校教育を重視しているが、手助けすることや

プレッシャーをかけず、長時間重労働に追われるという生活を送る中で、インタビュー対象者には親に頼らず生きていこうとする自立心や責任感、そしてある種の勤勉さが養われたことが共通していた。事例1は「親が一生懸命働いているので、私たち姉妹は何不自由なく学校に通えているので、感謝している。だから自分も一生懸命に勉強しなくてはと思うようなメンタリティを、中国系の子どもは皆持っていると思う。」と、事例6は、「親がレストランで重労働をしているのを見てきたので、自分たちはそんな重労働はしたくなかった。」と述べている。ここから読み取れる重労働をしている親への感謝や親のような重労働をしたくないという気持ちは、子どもの自立心や責任感、勤勉さを支えていたのではないか。これはインタビュー対象者に共通して指摘でき、まだ実証はできていないものの学校適応の要因の一つとなっているのではないかと考える。

親の階層的地位が低く中産階級的文化資本を持たない中国系二世代の学校適応の要因は、中国系アメリカ人の事例においてエスニック・コミュニティが生み出す社会関係資本によって説明されてきた。しかし、本論では、そうした社会関係資本がなくとも学校に適応できる要因を析出できる可能性を示した。オランダの中国系移民は、中国系アメリカ人によりも社会階層が同質であるが集住地区がなく散住し、第一世代は学歴が低く飲食業に集中していたことによって、中国系アメリカ人のように中産階級に上昇した中国系の親の築いた諸制度や社会関係資本を利用できなかった。しかし、階層的地位が低い親が学校教育を子どもの自立のための手段として重視してはいるが、子どもの学業達成を面子や誇りに結びつけて捉えず、子どもの学業達成に高望みすることなく、重労働に追われる生活を送ったことは、子どもに自立心や責任感、勤勉さを養いそれが学校適応の要因となっているのではないかと考えられる。

本論の調査結果によって析出された子どもの高い学業達成にこだわりを持たないフレームは、リーとシュウ [Lee and Zhou 2013] がメキシコ系アメリカ人二世代において明らかにしたそれに一見すると似ている。しかし、オランダの中国系の場合、親は子どもの自立の手段として学校教育を重視しながら高い学業達成にこだわりを持っていないのに対して、メキシコ系アメリカ人の場合、学校教育をそれ程重視していない点が異なる。筆者は、オランダ、イギリスとフランスの中国系二世代とその親が、主流社会での学校教育を成功のための手段として重視する民俗理論を共有していたことを既に指摘したが [山本 2014]、本論で析出した学業達成をめぐるフレームは、それを含むものであった。そして、親の学歴や階層的地位が低く、エスニック・コミュニティが社会関係資本を生み出さずとも学校に適応していたオランダの中国系の事例は、親が学校教育を子どもの自立の手段として重視していれば、子どもにプレッシャーをかけず手助けしないことによって、自立心や責任感、勤勉さが養われ、それが学校適応につながる可能性があるという新たな見解につながる。

さらに、オランダ社会において否定的イメージで捉えられてきたモロッコ系やトルコ系移民

とは対照的に、中国系移民は勤勉で問題のない集団として肯定的イメージで捉えられてきたこと¹⁰⁾も学校適応の要因となっていると考える。事例 10 は、ラッキーなことに教師をはじめとするオランダ人から差別されたことはなかったと言った。I. ワドルリング等はオランダのモロッコ系とトルコ系第二世代成功者を対象としたインタビュー調査¹¹⁾から、彼ら/彼女らは、高等教育を受けることを、主流社会の一員になり、自らのエスニック集団をめぐる否定的言説を逃れる方法と捉えていると指摘している [Waldring, Crul, and Ggorashi 2014]。しかし、中国系第二世代の場合、中国系移民をめぐる否定的言説を逃れる必要もなく、またワイドリング等はモロッコ系やトルコ系第二世代成功者は、学校不適応に陥る者が多い同じエスニック集団の若者と自らを差異化していると指摘しているが、その必要もなかった。このような中国系移民をめぐる肯定的イメージや、中国系には学校不適応者が少ないことも学校適応につながったのではないかと考えられる。

おわりに

以上本論は、文氏宗親会学業達成賞受賞者へのインタビューから、オランダの中国系第二世代の学校適応の要因を検討した。ここで「第二世代」としたインタビュー対象者は、20 代が中心であり、その親は 40 代から 60 代で「第一世代」として括れる。しかし、40 代の親は、「第二世代」である 40 代女性（事例 6）と同年代であり、第三世代とされるその子どもには既に成人している者もいる。また、受賞者の父親には、祖父に伴って移住した者もいた。第一世代、第二世代という世代別区切りは分析枠組みとして有効である局面はあるが、実際の人々の年齢はそうした区切りを横断して連続していることの方に目を向けさせられた。こうした連続性を考慮しながら、オランダの中国系移民にみる時代の流れの中での変化を捉えなくてはならないことを、調査を進めるほどに実感させられた。今後は、イギリス文氏宗親会での調査も実施し、オランダの場合と比較できればと考えている。

本論は、科研費基盤研究（B 海外学術調査）研究課題「EU における移民第二世代の学校適応・不適応に関する教育人類学的研究」（研究代表者：山本須美子、平成 24 年度～27 年度）の研究成果である。

10) 多文化主義政策を象徴する 1979 年の「エスニック・マイノリティ」と題する報告書から用いられた「エスニック・マイノリティ」には、階層的地位が低くないという理由で含まれなかった [Benton and Pieke 1998: 157]。

11) ここでは 2012 年から実施されているアムステルダムとロッテルダムの成功したモロッコ系とトルコ系第二世代へのインタビュー調査の結果に基づいている。これは、ヨーロッパ 7 カ国の移民第二世代成功者へのインタビュー調査による国際比較研究「成功への道: Pathways to Success Project」の一環として実施されたものである。

参 考 文 献

〔英語文献〕

Archer, Louise and Becky Francis

2007 *Understanding Minority Ethnic Achievement: Race, Gender, Class and 'Success'*,
Abingdon: Routledge.

Benton, Gregor and Frank N. Peike

1998 The Chinese in the Netherlands, In *The Chinese in Europe*, edited Benton,
Gregor and Frank. N. Peike, pp.125-167, London: Macmillan Press.

Bourdieu, Pierre

1974 The School as a Conservative Force: Scholastic and Cultural Inequalities, In
Contemporary Research in the Sociology of Education, edited by Eggleston, John,
pp. 32-46, London: Methuen.

Chua, Amy L.

2011 *Battle Hymn of the Tiger Mother*, New York: The Penguin Press.

Gibson, Margaret A.

1988 *Accommodation without Assimilation: Sikh Immigrants in an American High
School*, Ithaca & London: Cornell University Press.

Goffman, Erving

1974 *Frame Analysis*, Cambridge: Harvard University Press.

Lee, Jennifer and Min Zhou

2013 Frames of Achievement and Opportunity Horizons: Second Generation Chinese,
Vietnamese, and Mexicans in Los Angeles, In *Immigration, Poverty, and
Socioeconomic Inequality*, edited by Card, David and Steven Raphael, pp. 206-229,
New York: Russell Sage Foundation.

2014 The Success Frame and Achievement Paradox: The Costs and Consequences for
Asian Americans, *Race and Social Problems* 6(1), DOI: 10.1007/s12552-014-9112-7.

Lu, Wei-Ting

2013 Confucius or Mozart? Community Cultural Wealth and Upward Mobility
among Children of Chinese Immigrants, *Qualitative Sociology* 36: 303-321.

Luk, Wai-ki E.

2008 *Chinatown in Britain: Diffusions and Concentrations of the British New Wave*

Chinese Immigration, New York: Cambria Press.

Man, Wan Loi

2011 *The Man lineage in the Netherlands and Europe (1950-2010): A Migration Narrative*, MA Thesis, Leiden University.

Noam, Kris R.

2014 How National Context Influences the Childrearing Practices of Second-Generation Chinese Tiger Parents, *New Diversities* 16(1): 41-55.

Ngo, Bic and Stacey J. Lee

2007 Complicating the Image of Model Minority Success: A Review of Southeast Asian American Education, *Review of Educational Research* 77(4): 415-453.

Ogbu, John U.

1978 *Minority Education and Caste: The American System in Cross-Cultural Perspective*, New York: Academinc Press.

1987 Variability in Minority School Performance: A Problem in Search of An Explanation, *Anthropology and Education Quarterly* 18(4): 312-334.

1991 Immigrant and Involuntary Minorities in Comparative Perspective, In *Minority Status and Schooling: A Comparative Study of Immigrant and Involuntary Minorities*, edited by Gibson, Margaret A. and John U. Ogbu, pp.3-33, New York: Garland.

Portes, Alejandro and Min Zhou

1993 The New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants, *The Annals of the American Academy of Political and Social Science* 530: 74-96.

Putnam, Robert

2000 *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster.

Siu, Sau-Fong

1994 Taking No Chances: A Profile of a Chinese-American Family's Support for School Success, *Equity and Choice* 10(2): 23-32.

Yamamoto, Sumiko

2015 School Success and Failure: Changes Seen in Children of Chinese Descent in Paris, *Journal of Overseas Chinese* 11(1):56-70.

Waldring, Ismintha, Maurice Crul, and Halleh Ghorashi

2014 The Fine Art of Boundary Sensitivity, Successful Second Generation Turks and

Moroccans in the Netherlands, *New Diversities* 16(1): 71-86.

Zhou, Min

2005 Ethnicity as Social Capital: Community-based Institutions and Embedded Networks of Social Relations', In *Ethnicity, Social Mobility, and Public Policy: Comparing The U.S. and U.K.*, edited by Loury, Glenn G., Tariq Modood, and Steven M. Teles, pp.131-159, Cambridge: Cambridge University Press.

2009 How Neighborhoods Matter for Immigration Children: The Formation of Educational Resources in Chinatown, Koreantown and Pico Union, Los Angeles, *Journal of Ethnic and Migration Studies* 35(7): 1153-1179.

〔日本語文献〕

山本須美子

2014 『EUにおける中国系移民の教育エスノグラフィ』東京: 東信堂.

2015a 「オランダにおける文氏宗親会の現状と役割」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』49: 151-164.

2015b 「オランダにおける中国系第二世代の社会統合: ライフヒストリーの分析から」『移民政策研究』7: 151-166.

ワトソン・L・ジェームズ (瀬川昌久訳)

1995(1974) 『移民と宗族—香港とロンドンの文氏一族』東京: 阿吽社. (原著: Watson, James L., 1975, *Emigration and the Chinese Lineage: The Mans in Hong Kong and London*, Berkeley: University of California Press.)

山本：オランダの中国系第二世代にみる学校適応の要因